

早春賦

立春が過ぎてから、寒波が何回も押し寄せて来た。強い風が校庭を吹き抜け、時々どんと来る寒さが中学生の背中さえ丸めさせた。校舎の南裏手に続く雑木山では、時々、ウグイスなどの小鳥の姿がちらちらと見えはしても、人の気配に驚いてか、音も立てずどこかに飛び去ってしまうのであった。北の果て遠くに見える山脈には真っ白な雪が乗っかっていた。

隆司は、放送室に行くのに玄関からでなく、雑木山を背にした裏口から廊下が上がっていった。裏口から入れば、音楽室の前を抜けるだけで放送室に到達できるからであった。もし正面玄関から入れば、職員室の前を通り過ぎてから放送室なので、それが何となくいやだった。音楽室では、女生徒が合唱練習をしていた。

春は、名々のみ々の 風々の寒さや

谷々のウグイス 歌々は思えど

隆司は、四月になると隣のS市にある高校に通うことに決まっていた。その高校は、県立の進学校で、その卒業生はほとんどが大学に進学した。隆司がその高校を受験するにあたっては、当然のことのように、その先に国立大学受験を考えていた。隆司は、そうしたことを思うと浮き浮きすると同時に、未知の国に船出するような心細さをも感ずるのだった。

今、三月を目前に三年生の誰もが進路が決まり何となく落ち

着きをなくしていた。ほとんどの生徒が、卒業して多くの仲間とバラバラになってしまふことに不安を感じていた。この年頃の子どもたちはそれ以外にも不安材料を漠然と感じていたのであったが、ほとんど誰も親しい友人に対して以外には口に出して言わなかった。そんな不安定なころもちのなかで、ともするとケンカなどの暴力沙汰さえ出かねない雰囲気があった。

隆司たちのクラス担任の川村をはじめ教師たちは、毎年の経験から、生徒をどう落ち着かせるかを考え、今年もいくつかのイベントに取り組ませていた。音楽室の女声合唱もそうだったし、定番の卒業アルバム作りは、クラスの大半の生徒がなにかの仕事を受け持っている、掲載する写真の収集や選定をする生徒たちの他に、集合写真を新しく撮影するグループもカメラをかかえて試し撮りを始めていた。卒業文集を編集するグループなどは原稿集めに苦労していた。時にそれらの作業をさばるものも出て、彼らはやがて職員室に呼び出された。

隆司は、それらとは別に、放送劇を行うグループに属することになっていた。国語の教師の川村は、ここ一〇年来、ほとんど毎年、放送劇を生徒達にやらせていた。それは、早い時期の卒業生から、この時季の放送劇をあとあとまでもよく覚えている、という経験談をしばしば聞いたからであった。彼らの不安な精神状態へある種のメッセージを送り込むと、彼らのところに強い印象を焼き付けるものようであった。ある種のメッセージとは何か、川村は明確に理解したわけではなかったが、シナリオ選びには毎年、かなりの力を注いでいた。

川村は、七人の生徒に、放課後、放送室に来るように伝えた。隆司は、この日、野球部の後輩が冬の走り込み訓練で裏山めぐりて走り出すのを見送ると、乾いた北風が吹き付ける裏口から校舎に入り、放送室に向かったのであった。ちょうど、川村も職員室から出てきて入り口で一緒になった。川村は、ガラスで仕切られたブースの中に皆を誘うと七人を椅子に座らせ、

「今年は宮沢賢治の『よだかの星』をやる。話の筋は、授業で簡単に紹介したことがあるから知っていると思う。これがシナリオだ。声の質や性格を考えてキャストを組んでみた。スタッフは、それぞれの仕事に慣れた者にやってもらう」

シナリオが行き渡ると、

「まずキャストだが、一頁目を見て。『よだか』は石山隆司、『鷹』と『お日さん』に山田豊。二役やるのは、ひと役のセリフが短いかからだ。『カワセミ』と『鷺』に松下幸子、『大熊座』と『大犬座』に吉野孝雄、そしてナレーターは藤川鮎子。スタッフは、演出を青木旭、音響が安井仁志。先生は総監督ってとこだな」

川村は、それぞれの役回りが、どんなところに特徴があるかを、簡単に話した後

「今日は、棒読みを一回だけやって終わりとする。間違えても構わんで思うままにやってみろ。じゃあ、いいかな。藤川から、始め」

と、棒読みの開始を命じた。鮎子のナレーションは、最初少し戸惑ったところがあったが、まもなくところどころ滞りながらも進み始めた。

隆司は、はじめのうち、出番がなかった。鷹のいじめを聞きながら、思っていた、自分も入っていた野球部でキャプテンだった豊が鷹の役を演じるのはまったく適任だと。彼は、決断力があっててきばきと意見をいっては自分の思ったとおりに野球部の練習を進めることができたが、たしかに少し意地悪なところがある。青木は演劇部長だったのだから演出には最適任だと、青木が何か書き込みながらシナリオを負っている姿を見ながら思った。

しかし、鮎子がナレータに指名されたことには何となく違和感を感じていた。彼女は、三年間同じクラスであった。余り目立たない子だったが、数学がやたら出来る、というのがみんなの評価だった。事実、彼女は数学のテストで満点以外を取ったことを聞かない。ふだん余り賑やかにおしゃべりに興じたり、はしゃいではね回るようなところをほとんど見たことがない。そして何よりも、感情が表に出ない不思議な子だ、と隆司は思っていた。

二年ほど前の冬、木枯らしが木造校舎の窓枠を激しく鳴らした日のことであった。川村は、当時、隆司達のクラス担任ではなかったが、国語は川村が教えに来ていた。その授業で川村は、宮沢賢治の詩「永訣の朝」を取り上げていた。

けふのうちに

とほくへいつてしまふわたくしのいもうとよ

みぞれがふつておもてはへんにあかるいのだ

（あめゆじゆとてちてけんじや）

このように始まる「永訣の朝」を、川村は、皆に配ったプリントを使ってひととおり読み上げた後、生徒達に感想を求めた。真っ先に指されて松下幸子が

「妹とか兄弟が死んでしまったらとても悲しいと思います。きっと、年寄りが死んだときはぜんぜん違うだろうと思います」と言った。もうひとりの生徒は、

「とても妹思いで優しい人なんだよな、この作者」と賢治を評した。

ある男子生徒が、

「『あめゆじゆとてちてけんじや』が、よく分からない」と言った。川村は、

「みんな、これはどういう意味か、よく考えてみる」と言って時間をおいた。

「分かんねえ」という者もあれば、

「トテチテターって賢治さんや」などとふざける者もあって、しばらくざわついた中に、

「雨雪よ、とってきてくりょう」と土地の言葉で言う者がいた。

川村はそれを受けて、

「そのとおり。雨雪を取ってきてくれませんか、と岩手弁で頼んだのを、そのまま詩の一行にしたんだな」と続けた。

その後で、川村が鮎子を指名した。鮎子は、隆司の左斜め前に座っていたので、隆司には鮎子が立ち上がるとき一端右に向

きを変えて椅子から立ち上がるところがよく見えた。鮎子は、まるで無表情にスツと立ち上がると、感想を話し始めた。

「宮沢賢治は、妹が亡くなった前後に感じたことを、しばらく経ってから頭の中から取り出すように詩にしたんだと思います。頭に残って離れないでいたトシ子さんの言葉が『あめゆじゆ：：』だし、『うまれでくるたて：：』なんかのカッコでくくられた言葉です。この言葉が、その前後の詩を引き出したのだと思います」

「藤川は、賢治の創作の仕方を想像したわけだな。詩を読んでいてふっと感じたことも面白かったり大切だったりするのだが、藤川のように自分を客観的に離れたところに置いて、作品に向き合ってみて、そうして、その詩ができた状況を想像してみる。こういった詩の読み方もできる」と川村が説明を加えた。隆司は、川村の言った「自分を客観的に置く」ということをその時、強く脳裏に刻みつけることとなり、その後、折に触れ思い出すこととなったのである。

今日も、「よだかの星」の棒読みの前半が進む間、隆司は、「自分を客観的に置く」ということをやはり思い出していた。しかし、そのうち、隆司の出番が近づいたのでそれは消え去り、セリフを追うのが忙しくなった。読み上げた後で、これじゃダメだ、もう少し感情を抑えてやらなきゃあ、などと思っている内に棒読みは最後まで来ていた。

「今日は、これ以上、練習はしない。シナリオを持って帰ってよく読んで全体のイメージをつかんで、自分の役をどう演ずる

か、考えておくこと。いいな。明日の放課後から練習を始め、放送は三月十一日の水曜日。最後の授業のある日の昼休みだ」と川村は言って解散を命じた。

隆司は、シナリオをカバンに仕舞い込むと、豊と連れだって裏口から外へ出た。

「豊、藤川鮎子のナレーターってのは大丈夫かな。藤川って感情が表に出ないじゃん？」

「大丈夫だっぺ。川村先生って、よく人を見るからよ」

豊は、この地方の方言でおどけたように言って、校庭の脇を流れる小川の中につんつんと立っている葦の枯れ茎を抜き取って川向こうに槍のように投げた。その小川は、南にあるさほど高くない稜線から北に向かい下ってくる緩やかな傾斜面を、時々しつらえられたコンクリートの滝を流れ落ちては、下方の平地まで下り水田に水を供給していた。隆司達は、その小川の土手道を下っていくのであったが、学校を出た辺りからは、水田が、初夏には緑の、秋には金色の絨毯として眺められた。しかし、この時季には、薄茶けた枯れ野が拡がりじっと春が来るのを待っている風情であった。その中を左右に電車の線路が走り、時々、二両連結の車両が行き来した。

彼らは、高校に行ってから野球をやるかどうか、それぞれの高校へは自転車で通うのか、電車で通うのかなどを話しながら小川沿いの道をたどった。豊は、H市の高校で野球をやるつもりだと以前から言っていた。隆司はといえば、体力に自信もないし、そんなに野球にはこだわりのないので野球を続ける気は

していなかった。体力強化のために自転車通学をしようとは思っていた。

やがて、電車の線路にぶつかったところでそれぞれ自宅の方
向へ、隆司は右、豊は左へと曲がって分かれた。隆司は、電車
道に沿って歩きながら、「よだかの星」のことを考えた。線路
の土手には並行して小さな排水溝が走り、その縁にネコヤナギ
が白いふわふわした芽を着けていた。

隆司は、家に帰ってすぐに、シナリオを読み返して考えてい
た。

「人は、見てくれや地位、金を持っているかどうかで価値が決
まるのではなくて、社会でちゃんとした役割を果たしているこ
とが大切なのではないか、と宮沢賢治は、よだかを通じていっ
てるのだろう」

隆司は、これがメインテーマだと一応の結論じみたものを引
き出していた。だから、その辺りをうまく表現できればよいの
だろう、と思った。窓から、自宅の横の神社の木立を眺めると、
ウグイスらしい鳥の姿が見えた。

この時季、緑色の鳥としてはメジロとウグイスが来るのだが、
メジロは文字どおり目の縁が白いほか、早くからチツチツと泣
き声をたてるのに、ウグイスは暖かい日が来ないと鳴かなかっ
た。そして、メジロが小刻みに枝を飛んで歩くのに対し、ウグ
イスは木から木へというようにやや長い距離を飛んでは移動す
るので見間違えることがなかった。隆司は、もう数日前から、
このウグイスの姿を認めていたが、もうそろそろ声を立てるか

な、と楽しみにしていた。この神社は、藪が、山にいくつも平
行に走る小さな谷筋を小川に沿って下ってきたいちばん先端に
あるので、ウグイスも時々ここまで下りてくるのであった。

次の日、隆司は、当番の玄関掃除を急いで終わらせると、い
つものように放送室に近い裏口から入っていった。放送室には、
鮎子が既に来て椅子に腰掛けていた。

「ああ、藤川さん、今度の役、大変だね」
「うん」

隆司は、シナリオを読んで、この劇の主役はよだかなんだけ
ど、出番の多さからするとナレーターが主役なんだ、と気がつい
ていた。

「ほとんど、しゃべりっぱなしだもんな」
「うん」

鮎子はそっけなかった。

「なんだ、まだお前達だけか」

川村が、戸を開けてブースまで入り椅子を円形に並べた。ふ
たりもちよっとだけ手伝った。そこへ、残りのメンバーがバラ
バラと入ってきた。

「さあ、みんな、座って。この劇は、ナレーションが多いので、
メインマイクを藤川が使う。向かい合って石山が立つ。第2マ
イクをほかのメンバーが半円形に囲んで立つ。ミキサ―室の演
出の指示が見えるようになる。その体形に並んで。シナリオがマ
イクと口の間に入らないように、いいか。演出と音響はミキサ
―室へ」とみんなを配置につかせた。

川村は、

「まず、自分なりに、考えてきたとおりに読んでみる。演出の合図で開始」といってミキサー室に引き下がった。

第一回のリハーサルは、三〇分もかからずに終わった。川村は、何の注文もつけず、演出の旭に口火を切らせて合評をさせた。前半のよだかをいじめるところと後半のよだかの昇天に山場があることは、誰もが理解できた。よだかはあまり悲壮感を際立て過ぎない方が良くという意見に、隆司は、まだ抑えきれなかったかと頭をかいて反省した。賢治は、人の価値は見てくれとかどんな仕事に就いているかなどとは関係ないってことも言いたかったんだろうという意見が出た後で、少し沈黙が続いた後、青木旭が、おもむろに

「後半のよだかの昇天だけど、これって自殺なんだろうか」と切り出した。

「自殺でも他殺でもなくて、ひとりでに、それしなくなっただって昇天して星になったってことじゃないかなあ」といったのは豊だった。

「豊の鷹がよだかを殺したんだっぺや」と孝雄がおどけた。

「ばか、冗談言っているときかよ」と旭がたしなめた後でまじめな顔になって続けた。

「なぜ、よだかが死ななきゃいけないなかったかだよな。ひばりやいろんな星やなんか、友達ってゆうか、仲間がいたんだからさ、そいつらと仲良くやってきゃ良かったんじゃないかな」
それを受けて隆司は

「そうかもしれないけど、俺たちもさあ、仲間っていても受
験なんかじゃさ、自分が受かるためには他人が落ちなきゃなん
ないんだからよ、世の中じゃ、結局、誰もひとりぼっちなんじ
ゃないかな」と昨夜考えたことを言った。すると、幸子が

「私は、青木君のいうことの方が大事だと思う。よだかつて、
醜い姿形だったりするんだけど、本当は、自然界で決められた
とおりに虫を食べたりして一生懸命生きているだけなんだよね。
だから、それをいじめられるのって、理不尽っていうことでし
よ。そのことをまず何よりしっかり押さえた上ではじめて言え
ることだけど、そういうことに負けないためには、たいていは、
ひとりじゃだめで、仲間が束にならなきゃ参っちゃうんだよ。
大体、いじめるやつって力やなんか、強いんだしさ」

それに孝雄が応じて、

「うん、俺もそう思う。それによだかがおっかない顔したりし
てるのって、本当はやさしいからかもしれないねえ。優しい奴は、
外面、怖くしないと生きていきずらいんじゃない？」

隆司が、沈黙している鮎子の顔を見やった。孝雄の発言が終
わったとき、鮎子の瞳がくるっと回って光った、と思った。

この日の練習が終わって、隆司は、裏口から校庭に出た。ど
んよりと雲が空を覆い冷たい風が吹き雪でも降りそうな気配だ
った。音楽室の合唱練習はまだ続いていた。

いかにせよよとの この頃か

いかにせよよとの このころか

隆司は、一瞬、速く春が来てほしいと焦りに似た気持ちを味

わった。その時、正面玄関から出て校門に向かう鮎子の姿が目に入った。鮎子は、いつものとおりのセーラー服姿であったが、すこし猫背のためか、上着の裾が背中中で浮いて風に揺れ、爪先をたて気味に歩く彼女のリズムでスカートまでもが軽快に動くように見えた。隆司はそのリズムに乗った彼女の動きを好もしく思った。ふくらはぎのゆるやかな曲線が美しいと思い、はっとして視線を外した。

「先輩、お先します」と、野球部の後輩が帽子を取りお辞儀をして校門に駆けていった。

隆司は、まだ、リハースル初回目の気持の高まりを胸から消せずにいた。いや、消えないでほしいと思っていた。それは、鮎子の瞳が光ったことにわけもなく引っかけかかっていたからかもしれないなかった。彼女は、どちらかといえば、論理的で理性が勝っており、表情もあまり変わらないところがあって、こころの中がうかがえないタイプだった。でも、あの瞳の光は、何かに反応したに違いない、それは何だったのだろうか。隆司には、全く見当が付かなかった。

「鮎子は、間違いなく孝雄の『優しい奴は、外面、怖くしないと生きていきづらい』って言ったのに反応したんだ。優しい奴はどこまでも優しいんじゃないのか。怖い奴は根っから怖くないんじゃないのか。鮎子は、それが一緒になってるところに何をどんな風を感じたのだろうか。」

隆司は、その時、ハッと思い出していた。小学校の四年生のとき、隆司はやはり鮎子と同じ組に属していた。浜田広介の童

話「泣いた赤鬼」を授業で習ったとき、鮎子が無性におもしろがっていたことが記憶から甦ってきたのである。あの時は、いつもおとなしい鮎子が、はしゃいで

「先生、先生、おそろしい鬼が本当はやさしかったってところがとっても面白いです」と自分から手を挙げてしゃべっていた。それ以外に、自分から手を挙げて発言することなど、鮎子については見たことがなかったし、その後もなかったのである。怖いのは優しさの反面ってこと、そういう常識と違ったようにみえるところに面白さを見つける鮎子っておかしな奴だ、などと考えながら隆司は野球部の部室に向かって歩いていった。

部室で豊と落ちあい、いつもと同じようにふたり並んで帰りながらも、変なところでもしるがる鮎子の性格などをいまだに考えつづけ寡黙になっていた。豊は、恒例の教員チームとの送別野球のメンバーについてあれこれと隆司に話していたが、隆司の耳に、それらは全く入っていなかった。またぶり返した寒い風がふたりの間をさかんに吹きすぎていった。

最後の授業があった日の昼休み、各教室へ放送劇「よだかの星」が流れはじめた。前半は、孝雄たちの少しおどけ気味のいじめの場面がコミカルな感じをともなって過ぎていった。

「おれはあさっての朝早く、鳥のうちを一軒ずつまわって、お前が来たかどうかを聞いてあるく。一軒でも来なかったという家があったら、もう貴様もその時がおしまいだぞ」

孝雄の台詞に続く鮎子のナレーションは、教室で食事をしな

がら聞いている多くの生徒の気持ちをスピーカーに引き付けていた。

「雲はもうまっくろく、東の山だけ山やけの火が赤くうつって、恐ろしいようです。よだかはむねがつかえたように思いながら、またそらへのぼりました」

そして、後半はフィナーレに近づいていった。

「よだかは、どこまでも、どこまでも、まっすぐに空へのぼって行きました。もう山焼けの火は煙草の吸殻のくらいにしか見えません。よだかはのぼってのぼって行きました。」

鮎子は、ポーズをおくと、静かにすーっと息を吸い込んで、また始めた。

「寒さにいきはむねに白く凍りました。空気がうすくなったために、はねを、それはそれはせわしく動かさなければなりませんでした。つくいきはふいごのようです。寒さや霜がまるで剣のようによだかを刺しました。よだかははねがすっかりしびれてしまいました。そしてなみだぐんだ目を開けてもういっぺん空を見あげました。」

「あっ、『見ました』だ、『見上げました』じゃない」と隆司は一瞬思った。が、鮎子はかまわず続けた。

「そうです。これがよだかの最後でした。もうよだかは落ちているのか、のぼっているのか、さかさになっているのか、上を向いているのかも、わかりませんでした。」

鮎子のポーズは、ここは長めだった。彼女は目をつぶると次を続けた。

「それからしばらくたってよだかははっきりまなこをひらきました。そして自分のからだがいまりんの火のような青い美しい光になって、しずかに燃えているのを見ました。」

鮎子の顔に隆司の視線がひとりでに向いた。と、彼女の目に涙が浮かび、みるみる膨れあがってあふれ出し頬を伝って流れ落ちた。瞬間、隆司の心臓は感動に打ちひしがれた。鮎子は、ちよっと間を置いて、何事もなかったようにゆっくりと静かに最後を読み上げた。

「そしてよだかの星は燃えつづけました。」

低くなる鮎子の声を追ってエンディングの音楽が静かに流れだし、

「いつまでもいつまでも燃えつづけました。」

音楽の音は徐々に大きくなり、しばらく流れた後で余韻を残して静寂へと消えていった。

鮎子は、シナリオで顔を覆うとしばらくそのまま立っていた。川村先生の顔に笑みが浮かび、OKサインがガラス越しにブースの中に送られた。

全員、無事に終わったことに安堵してブースから出ていった。

鮎子は、みんなよりちょっと遅れて出た。川村が「おつかれさま、良くできた。最高だった」とまず鮎子の、そして順番に皆の肩に手を置いてねぎらった。

放送室から自分の教室へ戻る途中、窓から遠い山脈の雪が目に入ったが、隆司は、その雪が光って輝いて見えるほどに感動していた。鮎子自身のほかには、多分、自分だけが知っている

ことだと思ひ、これは誰にも言わないことにしようと誓っていた。窓の外は、放送劇の練習が始まった頃に比べ、随分、暖かな日射しに変わっていた。裏山につづく藪から、ウグイスの聲がホッホケキヨンと聞こえてきた。

鮎子は、その春、S市の私立高校へ入学した。同じS市の県立高校へ通う隆司は自転車通学だったこともあり、電車通学の鮎子とは顔を合わすこともなかった。それどころか、その後、五〇年の月日が経って、その間、隆司が大学を出てから全国を転勤して歩いていたせいもあってか、一度も鮎子の姿を見えない。しかし、隆司は、毎年、春まだきの頃、「早春賦」の歌とともにシナリオを読む鮎子を思い出すのである。